

第3章 今、求められる力を高めるための体制づくり

第1節 体制整備の4つの視点と校長のリーダーシップ

質の高い豊かな学習活動を推進し、生徒の課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力などを高めるためには、総合的な学習の時間に関する体制づくりが欠かせない。そして、その土台となるのが、校長のリーダーシップである。

校長のリーダーシップの下、全教職員が学級、学年の枠を越えた、実践研究や意見交換等を実施しながら、適切な指導計画を作成することとなる。また、指導計画を作成する際も、実施する際も保護者や地域住民などとの連携が必要となり、ここにも校長のリーダーシップが必要となる。

各学校が、適切な指導計画に基づき、生徒一人一人にとって、充実した総合的な学習の時間を実現するためには、以下に記した4つの視点を視野に入れた体制整備が重要となる。

体制整備のための4つの視点

校内組織の整備	授業時数の確保と弾力的な運用
生徒に対する指導体制 ・生徒の学習集団に応じた指導体制の工夫 実践を支える運営体制 ・学習を円滑に推進する教師の適切な職務・役割の分担と「校内推進委員会」の充実 ・運営の中心となる「総合的な学習の時間コーディネーター」 校内研修等の充実	年間授業時数の確保 目的に応じた単位時間等の弾力化 ・生徒の実態、指導内容のまとめ、学習活動等を考慮して、効果的な単位時間・時間割を設定 1年間を見通した授業時数の運用 ・各学校の創意工夫による年間指導計画等の編成 ・活動の特質に応じ夏季などの長期休業日の効果的な活用
学習環境の整備	外部との連携の構築
学習空間の確保 ・多様な学習形態に対応し、掲示等による生徒の学習への関心等を高揚できる学習空間の確保 学校図書館の整備 ・学校図書館の学習・情報センターとしての機能の充実 情報環境の整備 ・PC環境の充実と教師のICT活用指導力の向上	地域の教育資源の積極的活用 ・日常的な連携による協力的システムの構築 ・地域連携を推進する組織の設定と教師の配置 ・地域資源リストの充実と活用 総合的な学習の時間の成果の伝達 ・成果発表の場と機会の設定 ・学校と家庭・地域との信頼関係の構築 活性化に向けた生徒の地域貢献

校長のリーダーシップの下に進める校内組織の整備・活性化



総合的な学習の時間にかかわるビジョンの明確化と教師への共有

第2節 組織整備の実践事例

各学校では、総合的な学習の時間の目標を達成できるように、全教職員が協力して全体計画及び年間指導計画、単元計画などを作成し、互いの専門性や特性を発揮し合って実践していく校内推進体制を整える必要がある。

この節では、生徒に対する指導体制や実践を支える運営体制と教師のカリキュラム開発能力等を高めるための研究推進体制の主に2つの側面から、校内推進体制の実践事例を紹介する。

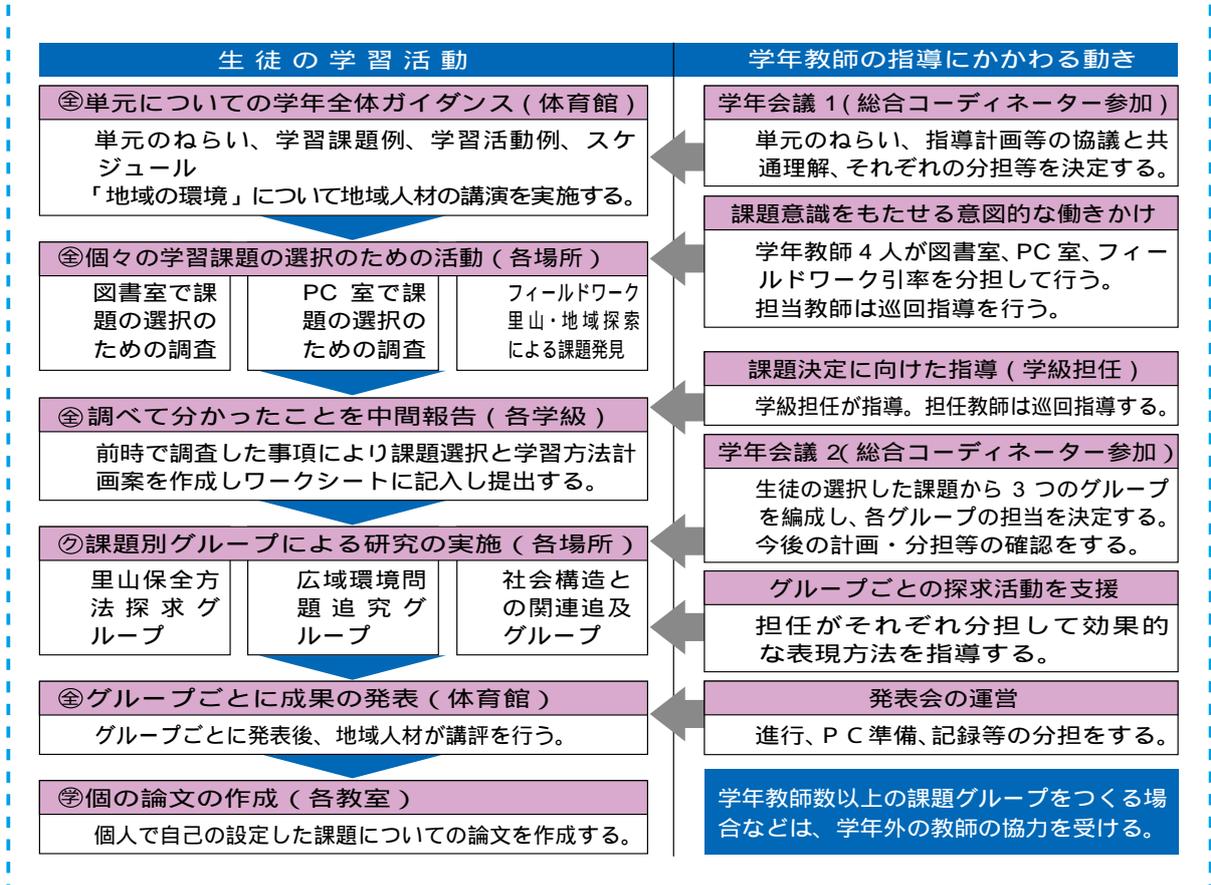
1. 指導体制と運営体制の整備

(1) 生徒に対する指導体制

総合的な学習の時間の授業は、各学校で定められた目標や内容により、学級担任が自学級を直接指導するばかりではなく、学級枠を取り外して学習集団を組織し学年内の教師が指導を分担する指導体制や、学年枠も外して学習集団を構成し全教師で指導を分担する指導体制などにより学習活動が行われることがよく見られる。ここでは、それらの実践事例を紹介する。

事例 学年教師が学級枠を外した学習集団を分担して指導した例

A校は大都市のベッドタウンにある1学年3学級の中規模校です。A校は里山が近くにあることから、この里山の保全等をテーマとした環境学習を第1学年において、学級枠を外した課題別学習集団により行いました。指導は学年教師を中心に地域人材を活用して推進しました。



事例 全教師が学年枠を外した学習講座を協力して指導した例

《B中学校の概要》

生徒数 218人 学級規模 各学年2学級 教職員数 14人 学区域の特色 都市部住宅地

B中学校では、毎年、4月から5月初旬まで、年間を通した研究活動を行うにあたっての基礎講座を学年の枠を外し設定しています。

この基礎講座は、「研究概論講座」「情報収集活用講座」「B中地域理解講座」の3講座です。いずれも「初級、中級、上級」の3つのコースに分かれていて、生徒たちは学年に関係なくコース選択を行うことができます。

各講座、コースの計画及び学習内容は、担当教師が総合的な学習の時間の全体計画・各学年の年間指導計画を踏まえ作成した後、全教師により意見交換、調整がされています。

初級コースでは、前年度中に上級コースを終えた第3学年生徒が指導をする場合もあります。

1年間の学習の流れ

4月 ↓ 5月初旬	全校での「基礎講座」における学習 全体ガイダンス（B中総合的な学習の時間についての説明、各講座内容の説明） 講座選択（2講座） 「研究概論（研究の進め方）講座」「情報収集活用講座」「B中地域理解講座」での学習
5月 ↓ 2月	各学年での探究型「学習」 第1学年...地域に学び、地域をよりよくする探究的学習。地域福祉施設訪問。 第2学年...職業調べ、地域での職場体験学習。上級学校（高校、大学）訪問。 第3学年...国際理解にかかわる学習。小学校での英語教師体験。地域貢献学習。
3月	全校での年間研究成果報告会の準備と開催（保護者、関係者・地域住民に公開）

事例 全教師が第1～3学年の縦割り班活動を協力して指導した例

《C中学校の概要》

生徒数 80人 学級規模 各学年1学級 教職員数 12人 学区域の特色 農山村部

C中学校は、小規模校で1学級あたりの生徒数も少ないために、授業等で学び合う学習活動があまり深まらない傾向がありました。

そのような中、C中学校は、9月から12月の4ヶ月間、第1学年から第3学年の縦割り班活動により、「林業体験」を環境教育や地域貢献学習と関連付けて実施することにしました。

学習は、第3学年をリーダーとして進めていきますが、追究する課題により、縦割り班の担当教師を決めていきました。（例えば、環境教育との関連で、酸性雨被害を研究するグループには理科の教師を担当とし割り当てていきました。）

異年齢集団による学習を実施する上では、学年ごとのねらい（評価規準）を明確にし、指導教師がそのねらいに基づき指導・評価するよう留意しました。

縦割り班による学習の流れ

7月 8月	全教師による指導計画等の共通理解 ・総合的な学習の時間コーディネーター（以下コーディネーター）を中心に単元のねらい、内容、計画、指導体制等についての検討、共通理解を全教員により行う。
9月	全校生徒への説明会から縦割り班の編成 全体説明会でコーディネーター等から単元の学習内容、学年ごとのねらい等についての説明を行う。 学級で個々の生徒が山林にかかわって追究したい内容等を考え、課題を設定する。 縦割り班の編成を行う。（の内容を集約し、全教師の会議で編成を検討する。） 第3学年生徒を中心に研究主題等についての検討を行う。全教師が編成された班の担当となり支援、指導、助言を行う。
10月	縦割り班ごとの探究的な学習の推進
11月	縦割り班ごとの林業体験
12月	探究的学習のまとめと報告会の実施

事例 教科の専門性を生かした指導の例

《D中学校の概要》

生徒数 496人 学級規模 各学年5学級 教職員数 34人 学年教師の教科 国語、
数学、社会、理科、英語、家庭、音楽、保健体育 学区域の特色 都市部、元城下町

D中学校は、地方都市にある各学年5学級の中規模校です。城下町であり、江戸時代の史跡、建造物、祭祀などの無形文化財等が多く残ることから、第3学年では、修学旅行と関連させ、総合的な学習の時間の内容を、「日本文化や日本人の心について積極的に探究する学習」として、学年の教師の特性、教科等を生かした指導体制による実践を行いました。

学習の過程では、修学旅行先「京都・奈良方面」についての事前学習や現地学習で探究した内容と自分の地域での日本文化や伝統を守る方の心の比較等も行い、学びを深化させていきました。

生徒の学習活動

1 単元についての学年全体ガイダンス (体育館)	5月
単元のねらい、学習課題例、学習活動例、スケジュール等について学年の担当教師(A、B)から説明する。	
2 各学級のグループごとに学習テーマの選択	5月
各学級にある6つの生活班(1班5人又は6人)が、「地域の伝統芸能」「地域の生活文化」「地域の言語文化(方言等)」のいずれかの研究対象を選択する。(各研究対象は2班ずつになる)	
3 小グループごとに研究を実施	5月~6月
各学級で小グループごとに研究を実施する。	
4 各学級・学年でグループごとの研究報告会を実施	7月
各グループごとに探究した内容について各学級で発表する。また、その中で3グループは学年全体報告会で研究成果を報告する。	
5 各グループが京都等にかかわる学習テーマの検討	7月
各グループは、自分の地域について調べた内容と関連付けた研究テーマを設定する。例「市域の言語文化」「京都・奈良の言語文化」	
6 グループごとに学校及び現地での研究	7月~10月
各グループは、研究テーマと関連させた京都・奈良でのグループ行動スケジュールを立てる。 研究テーマにかかわる修学旅行の事前の研究をする。 京都・奈良において現地での取材、実地研究を行う。 事前研究、現地での研究をまとめる。 郷土にかかわる研究結果と京都・奈良にかかわる研究とを比較研究し、その結果等をプレゼンテーション資料としてまとめる。	
7 各学級でグループごとの研究報告会を実施	10月
各学級でグループごとに探究した内容について発表する。その際、保護者・地域人材等を招いて報告する。	

学年教師A(国語科 副担任)

- ・本単元のカリキュラム開発・推進の中心。
- ・ライフワークとして郷土の方言を研究。日常的に郷土の言語についての研究者と交流。
- ・教科と研究を生かし「言語文化」グループの指導を担当。
- ・司書教諭として調べ学習の資料を公立図書館から集める他、生徒のレファレンスにも対応。

学年教師B(社会科 担任)

- ・学年主任。他学年と活動場所等の調整。
- ・教科の専門性を生かし、全グループを巡回して、地理・歴史についての専門的な助言。
- ・修学旅行担当として、5以降の学習を統括。

学年教師C(家庭科 担任)

- ・研究主任。研究テーマや新学習指導要領のねらい、内容と整合するよう配慮を行う。
- ・教科の専門性を生かし「生活文化」グループの指導を担当。
- ・「学年だより」担当として、学習成果等をまとめ、掲載。

教師D(音楽科 専科)

- ・教科の専門性を生かし「伝統芸能」グループの指導を担当。伝統芸能にかかわる地域人材との連絡・調整。

(2) 実践を支える運営体制

学校の多くの学習活動は、一人一人の教師が個別に行うのではなく、推進組織が立ち上げられ互いに連携して進められている。特に総合的な学習の時間では、横断的・総合的な学習が展開されるため、教師の専門性を生かした全教職員の協力による取組が求められる。そのため指導方法や指導内容について、気軽に相談できる仕組みを位置付けておくことが大切になる。

校長は自分の学校の実態に応じて既存の組織を生かしつつ、新たな発想で運営のための組織を整備し、生徒の学習活動を学校全体で支える仕組みを校内に整える必要がある。

事例 小規模校の運営組織の例

E校の教師の総合的な学習の時間にかかわる分掌内容

教職員	校務分掌	総合的な学習の時間についての分掌内容
a 教頭		運営体制の整備、校外の支援者、支援団体との渉外
b 主幹教諭	教務主任 ICT 担当	各種計画の作成と評価、時間割の調整、指導の分担と調整、情報機器等の整備及び配当
c 教諭	生徒指導主任、担任	学習活動時の安全確保、小学校との連携の推進
d 教諭	1 学年担任、総合担当	校内の連絡・調整、研修、相談 総合的な学習の時間コーディネーター
e 教諭	2 学年担任 研究主任	学年内の連絡・調整、研修、相談 研究計画の立案、校内研究実施
f 教諭	3 学年担任、担当	学年内の連絡・調整、研修、相談
g 教諭	進路指導主任、 司書教諭 3 年担任	職業や自己の将来に関する学習にかかわること、高等学校との連携の推進、必要な図書整備、生徒の図書館活用支援
h 教諭	養護教諭 保健主任	学習活動時の健康管理・健康教育にかかわること、食育にかかわること

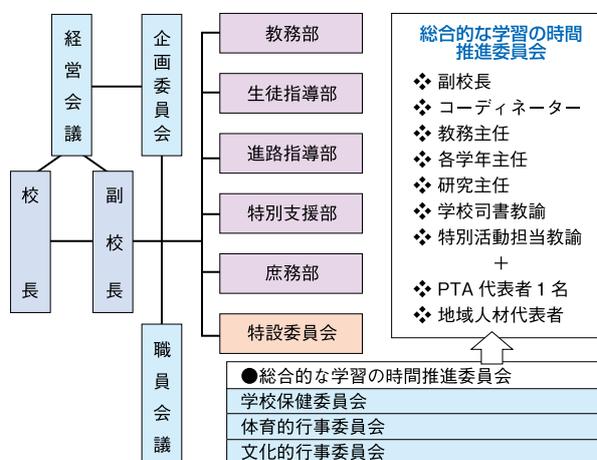
E校は、全校4学級の小規模校です。教職員数も少ないことから、教師が複数の校務分掌を担当しなければならない実態がありました。

総合的な学習の時間においても、複数の校務分掌を担当する1人の教師により全学年の指導計画の作成や外部講師との調整が行われていて、教師の共同性を高めることができませんでした。

本年、新校長が着任し、総合的な学習の時間については、既存の組織を生かし、全教師が教科等の専門性を発揮できる指導体制づくりを進めるとともに、一人一人が計画、運営についても役割と責任をもつことにしました。

このことにより、総合的な学習の時間についても、教師同士が話し合う場面が増えるとともに、全教師が学年、学級の壁を越え、それぞれの専門性を生かし行われるようになりました。

事例 大規模校の運営組織の例



全校20学級の大規模校のF校では、各学年により総合的な学習の時間の年間指導計画や単元指導計画が作られ学習活動が推進されていました。

このような実態であるが故に、全体計画との整合を意識しないで学習が行われたり、異学年(生徒・教師)と合同した学習等がほとんど計画されなかったりするなどの課題が見られました。

このような課題の解決のため、昨年度、コーディネーターと各学年担当者等が1ヶ月に1度、情報交換・協議を行う「総合的な学習の時間推進委員会」という特設の委員会組織を立ち上げ、総合的な学習の時間をより共同に行えるよう改善しました。

F校「総合的な学習の時間推進委員会」における主な会議内容

およそ1ヶ月に一度、開催されています

総合的な学習の時間の全体計画の作成(改善)
各学年の年間指導計画・単元計画の作成(改善)

総合的な学習の時間の評価規
準の設定
評価法(ポートフォリオ、パフォーマンス、自己・相互評価)等の検討

教師の指導組織の検討
情報交換による共通理解
「通信・広報」の編集
校内研修の企画



総合的な学習の時間コーディネーターが中心となり運営します

縦割り班による学習など異
学年集団による学習のカリ
キュラム開発と実施に向け
た調整

学習活動に合わせた時間割
の工夫
各学年の活動場所の調整
特別活動担当との調整

学校間(近隣中学校、姉妹
校)の交流の検討
校種間(幼稚園、小学校、
高等学校)の連携の検討

保護者説明会の企画
関係機関との調整
施設・人材リストの作成、
利用の手引きの作成

マネジメント・サイクルに
よる自己評価の実施
評価結果による改善策の検
討

委員会は時間割に
位置付け、授業時
間内に実施されて
います

F校「総合的な学習の時間コーディネーター」の具体的な職務内容

<p>〔指導計画等の作成〕 全体計画作成の中心となる 学年の年間・単元指導計画作成 を支援する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域や地域人材の実態・特性を知るため地域巡りや地域の人との交流等を積極的に行った。 ・自校の教育課程・校長の経営方針を熟知するよう努力した。 ・生徒・教師・保護者等の思いや願いを理解するよう対話に努めた。 ・総合的な学習の時間についての理解を一層深めるために関連する研究会、研修会等に主体的に参加し自己啓発に努めた。
<p>〔教職員の協働の促進と意欲の向上〕 校内推進組織を運営する 情報交換を活性化させる 校内研究との関連を図る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な情報交換会を企画・実施した。 ・学年を越えて協同して実施する学習を提案、実施した。 ・各学年の授業の情報を収集し、その取組の良いところを随時、職員会議等で積極的に伝えた。また、「通信・広報」に記載し発行した。 ・若手教師の指導について直接指導助言を行った。(OJTの実施) ・校内研究等を先導した。また、先進事例等を集め随時報告した。
<p>〔保護者、地域、他校、異校種との連携の推進〕 連絡会を開催する 授業公開を実施する 「通信」を発行する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校門横に保護者・地域向けの掲示板を設置し、写真等による学習状況の報告や協力要請の呼びかけを掲示した。 ・教師がPTA・地域行事、学校公開に出席するよう働きかけた。 ・近隣校の総合的な学習の時間の内容等を自校で定期的に報告した。 ・近隣校小学校との共同校内研究会を開催した。近隣校の総合的な学習の時間にかかわる校内研究会に参加した。
<p>〔指導計画・内容等の評価と改善〕 活動の成果を検証する 校内外の評価を実施する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全生徒のポートフォリオ評価等を実施した。 ・国・自治体実施の学力調査・意識調査との関連を分析し、成果と課題を考察し全教師に紹介した。 ・生徒・保護者・地域人材対象の意識調査等を実施した。 ・年2回、指導計画等についての自己評価を実施し改善に結び付けた。

2. 校内研修等の充実

総合的な学習の時間を充実させ、その目標を達成する鍵を握るのは、指導する教師のカリキュラム構想、開発等の力量によるものが大きい。また、総合的な学習の時間は、教師がチームを組んで指導に当たることによって、生徒の多様な学習活動に対応できることから、教職員全体の指導力向上を図る必要もある。したがって、すべての学校で年間の職員研修計画の中に、総合的な学習の時間のための校内研修を確実に位置付けることが極めて重要になる。

校内研修のねらいや内容は、各学校の職員構成や実践上の課題に応じて適切に定めていくべきものであるが、まずは、『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』を参考に総合的な学習の時間の趣旨や内容等についての理解を教職員全体で確かにする必要がある。

また、具体的な研修計画を決定する場合は、できる限り実践を進める教師の希望や必要感を生かした方法、内容等を選択する必要がある。

授業研究では、生徒が学習に取り組む姿を通して教師の指導について評価し、指導力の向上を図ることが必要である。また、総合的な学習の時間の授業を教師が互いに参観できるような工夫をすることにより、教師同士が学び合える職場風土が生まれ、日常の授業を通じたOJTに発展していったりする可能性がある。

総合的な学習の時間の校内研 〔修内容・方法例〕

校内研修の内容例

- 総合的な学習の時間の目標、内容、育てようとする資質や能力及び態度の設定について
- 総合的な学習の時間の教育課程における位置付けや各教科、道徳、特別活動との関連について
- 全体計画、年間指導計画、単元計画の作成・見直し及び評価について
- 教材開発の在り方や地域素材の生かし方について
- 総合的な学習の時間のためのICTの活用についてなど

校内研修の方法例

《校内での研修例》

- グループ研修：指導計画作成や教材作りの演習、テーマに基づくワークショップなど
- 全体研修：視察報告会、講師を招いての講義など

《校外での研修例》

- 実地体験研修：生徒の体験活動の臨地研修とその評価など
- 教材収集研修：地域の諸事象の観察や調査など

「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編より」

総合的な学習の時間を進める中で教師が育つ
OJTの中で高められる教師としての専門性

総合的な学習時間の計画・実施、評価の中で高まる専門性

計画・準備段階で高められる専門性
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 指導計画を作成する力、授業（学習活動）を構想する力 ➤ 学習指導要領及び学習指導要領解説についての理解 ➤ 生徒、地域等について、分析する力、実態把握をする力 ➤ 自校教師、他校教師や地域人材との交渉力、調整力 等

学習実施段階で高められる専門性
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 生徒の興味を引き出し、個に応じた指導をする力 ➤ 話し合い活動など集団による学習を支援・統制する力 ➤ 学習状況を的確に把握し、授業を進める力、評価する力 ➤ 生徒の思いや願いを理解する力 ➤ 他教師、外部人材と協同して指導する力 等

事後評価段階で高められる専門性
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 評価規準に照らして生徒の達成状況を評価できる力 ➤ 指導計画等の課題を見いだす力、活動の成果を見出せる力 ➤ 指導計画、授業（学習活動）を改善する力 等

総合的な学習の時間を充実させるためには、指導計画を策定し、運用する力が必要となります。また、実践に伴って次々と生まれる諸課題を解決する力や地域人材等と調整する力も必要になります。

このことから、日常において総合的な学習の時間の改善努力を行うこと自体がOJTであり、教師としての専門性が磨かれます。ある自治体では、総合的な学習の時間のカリキュラムづくりを小・中学校の若手教師のセンター研修テーマとして、教師としての専門性の向上を図っています。

OJT「On The Job Training」とは
「日常的な職務を通して、必要な知識、技能、意欲等を意図的、計画的、継続的に高めていく取組（人材育成）」